
ダイヤモンドヴェール ーノンカット版ー

B u g o m i e l

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダイヤモンドヴェールーノンカット版ー

【Nコード】

N5963Y

【作者名】

Bugomiel

【あらすじ】

「エリートビジネスマンの不倫マネジメント」の登場人物が、舞台をパリから東京に移し、六本木ヒルズや東京ミッドタウンのシーンを始め、その後のストーリーを展開する。

R15

六本木ヒルズ

彼は、六本木ヒルズのタワーのエントランスから出て来た女性が、背中にかかった髪を、時おり風になびかせて歩いてくるのを見ていた。

少しカールした毛先が、歩くたびに背中で揺れている。

黒のラップドレスは、スリムな体型と胸のふくらみを強調して風を受ける。

背筋を伸ばしてまっすぐに歩く姿は、たとえようのない美しさと言っても過言ではないと思う。モデルウオークほど脚をクロスさせているわけではないが、まるで目に見えないラインの上を歩いているように、優雅に空気と一体化していた。

彼女は入口につないであった、小さな犬に向かって微笑むと、顔をあげ、彼を見つけて柔らかく笑う。

「隆之さん」

「君を待たせなくてよかったよ、栞」

「迎えに来てくださったの？ まだお疲れなのに」

隆之の妻は、彼の腕に滑り込むように両手を絡ませた。

「あんな愛らしい顔で微笑むから、みんな君に見とれていたよ」

「あそこにつないであった犬と目が合ったの。ほんとに可愛い目で私のこと見つめるのよ」

「一応戸外ではあるけど、ヒルズのプラザに、犬ってつないでいいの？」

「コマーシャル用なのよ。ほら、期間限定のカフェスペースが、今はiPhoneカフェになってるでしょう。もちろん、本物の次郎さんじゃないけど」

そういえば、TVでよく見かける、赤い首輪の白い北海道犬に似ている。

38歳の織田栞おだしおりは、大人の魅力で包まれてはいたが、雰囲気はあどけなさを残していた。

聡明さの際立つ隆之たかゆきよりは、ずっと年下に見えたが、本当は三つ年下なだけであつた。

「ふふふ、本当はね、あなたと一緒にいるときのほうが、注目を集めるのご存知だった？ 私が、人に見られるの、お気に召さない？」

「いや、そんなことで僕は嫉妬なんかしない。むしろ、いいことだと思うよ。人に見られることによって女性ホルモンが分泌されて、君はますます美しくなる」

（それに君は、無邪気そうに見えて、危ない男は寄せ付けない術を心得てるから）

こうして話している間も、若いビジネスマンが、栞にさりげない視

線を向けて、視線が合わないように隆之にも目を向ける。

二人が注目を集めているのは事実だが、おそらく誰もが、自分自身を一番美しいと思っているのではないか、ここはそういうスノッビ―な雰囲気満ちた空間だった。

栞は指を伸ばして、くぼみのできた鎖骨に流れるダイヤモンドのネックレスにさりげなく触れた。

「今日の視線は、あなたにいただいたネックレスのおかげじゃないかしら」

パリのChaumetで、隆之が栞のために買ったものだ。

栞の身につけるものを選ぶセンスの良さは、隆之に備わった才能のひとつだった。

栞の誕生日プレゼントを兼ねての贈り物である。

この程度のものは、いつも妻に贈っている隆之だったが、今回はなんとなく後ろめたさを感じていた。

（別に、これは『あのこと』の埋め合わせのために買ったわけじゃない……）

栞は、海外在住の日本人のために、日本のトレンド情報を伝える小さなコミュニティ誌に記事を書いていたが、自分より夫のほうが情報通なのは明らかだった。

もともと、栞の仕事は、主婦業のかたわら、パートタイムで少しだけ携わっている程度の仕事で、

それに比べて隆之は、彼の会社でいつどのような産業に関わるかもしれないなかったから、常にアンテナを張り巡らせており、もともと規模が違う比較だったが……

「ほんとに小さなコラムなの」と本人が言つとおりで、月刊誌だったから、仕事にそれほど時間は取られない。

子供たちの学校の行事にも欠かさず参加していたし、料理も熱心な栞だった。

土曜日、栞はヒルズに新しくオープンしたカフェを紹介する取材で、ここを訪れていた。

この後、ピアノのレッスンをしている13歳の娘、薫とサッカー教室に参加している11歳の息子、祐紀ゆうきを迎えに行く予定だった。

おととい海外出張から帰って来たばかりの隆之を氣遣つて、彼を家に残して来た栞だが、こうして迎えに来てくれたところを見ると、もう疲れが癒されたようだった。

ヒルズのプラザ広場は、行き来する人で賑わっていた。

広場を囲む壁のように張り巡らされた噴水は、ときどきレース模様のようない泡を立てて壁の上を静かに流れ落ちる。まるで自分が宇宙へ吸い込まれて行くようなおもむきがあった。

巨大な蜘蛛のオブジェの下で、栞が立ち止まる。

「あ、待って、子供たちの好きなバゲットを買って行かなくちゃ。」

お昼はスモークサーモンのサラダを作るつもりなの」

彼女は、隆之の腕から手を外して、遠慮がちに彼の手のひらに指で触れた。

（人目を気にしているの？ そんな必要ないよ）

隆之は、彼女の手を取って指を絡めながら、ベーカリーへと足を開ける。

（あなたといると羨望のまなざしを向けられるのが、嫌いじゃない
… むしろ誇りに思うわ）

栞は、愛する夫と手をつなぎながら、この上ない幸せを感じていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5963y/>

ダイヤモンドヴェール ーノンカット版ー

2011年11月18日05時50分発行